都道府県別賞一等

未来を守る小さなお守り

宮崎県　小林市立小林中学校　三学年

玉置　らら

「命を守る」とは、どういうことだろう。病気を早期発見し治療すること。危険から人を助けること。以前の私はそう考えていた。しかし、二つの体験から、命を守るという言葉には、「これからの人生」を守ることも含まれているのではないかと今はそう思う。

中学校に入学して間もない頃、私はスポーツの練習中、二回宙返りに失敗し、首と腰を痛めて二週間入院した。体を動かせない痛みも辛かったが、入学したばかりで学校へ行けず、新しい友達との関係を築けないことも、また同じくらい不安だった。『早く治して学校へ行こう。』と焦る私に、家族は言った。「色んな心配があると思うけど、保険に入っているから、元通りの生活ができるまで安心してゆっくり治療しよう。」その言葉に安堵し、私は焦らずリハビリに向き合えた。しかし、当時の私は、入院費や治療費は保険があるから支払わなくていいもの、という安易な考えでいた。その考えを変えるきっかけになったのが、今回の熊本地震の経験である。

大きな揺れで、私は弟ととっさにテーブルの下へ潜り込んだ。食器の割れる音が響き、テレビが前後に大きく揺れた。『家族は大丈夫か、次に何をすればよいか。』恐怖と心配で鼓動が速くなった。夜中は余震で目を覚ました。ニュースで、災害は一度起きたら終わりではなく、二次災害や生活の不便が長く続くことを伝えていた。この日の事は、生涯私の心と脳裏に深く残るだろうと確信した。

地震から十日後、車で熊本駅へ向かった。窓の外には、崩れた瓦屋根や墓石、ひび割れた道路が続き、私たちもその壊れた道をゆっくり走行した。コンビニに、「トイレ断水中」という貼り紙もあった。当たり前の日常が奪われた現実がそこにはあった。道路は青信号になり、クラクションを鳴らされても動かない作業車があった。運転手は疲れて眠り込んでいた。心配した母が声をかける姿を見ながら、災害は、建物や道路だけでなく、そこに暮らす人、復旧を支える人、周囲の人々の生活や心まで巻き込んでいくのだと実感した。

数日前、私は地震発生時の手術中の映像を見た。激しく揺れ、落下物や医療機器が動く中、二人の医師が両手を大きく広げ、背中を盾に患者に覆いかぶさっていた。目の前の患者を必死に守る姿は『何があっても、この命は守る。』という信念が伝わる行動で感動した。

その姿に心を動かされたからこそ、私は思う。どれほど大切に思っていても、

人の力では防げない事故や災害がある。大切な人を失っても遺された家族の時間は止まらない。悲しみを抱えながらもこの先の生活を生きていかなければならない。待ってはくれないのだ。

では、その残された人生を守るために、私たちは何ができるだろう。その一つが生命保険だと思う。もちろん保険金で命が戻ることはないし、保険と命を同じ土俵にあげること自体、本来間違っている。それでも、テレビで、「もう娘は帰ってこない。」と泣き崩れる姿を見ると、心のケアと共に今の生活を支える生命保険は、小さな味方になり得ると感じた。ここまで考えたとき、私の入院中の家族の言葉、「ゆっくり治療しよう。」は、違う意味をもってよみがえった。そこには、私の今だけでなく、これからの生涯を大切に考えた家族の優しさが溢れていることに気付いた。

生命保険も同じだ。単なるお金の仕組みではなく、『もしものとき、大切な人に未来を歩んでほしい。』という願いを託す贈り物なのだ。中学生には遠い話に思えるかもしれないが、愛する人の未来を思う気持ちに年齢は関係ない。何も起きていない今こそ、家族と命について話すことが大切だ。生命保険は、命そのものは救えないが、想いを未来へ届け、遺された人の背中をそっと押す力になる。生命保険とは、目には見えない〝小さなお守り〟だと私は信じたい。